

ユースシンポジウム2024

つなぐ、つながる、 ワカモノガタリ

～「こどもまんなかアクション」リレーシンポジウム in 京都～

報告書

ユースシンポジウム2024

つなぐ、つながる、ワカモノガタリ ～「こどもまんなかアクション」リレーシンポジウム in 京都～

2024年12月15日(日)10:00～16:00
京都市下京青少年活動センター他

プログラム

- 10:00～10:30 オープニング
- 10:30～14:00 京都ワカモノガタリ～地域で遊ぶ若者～
小さな若者博
- 14:00～16:00 ワークショップ～クロージング

参加者数 延べ350人

主催：京都市・公益財団法人 京都市ユースサービス協会
(主幹：京都市下京青少年活動センター)

共催：こども家庭庁

後援：京都市はぐくみネットワーク、KBS京都、京都新聞、
エフエム京都、京都リビング新聞社、京都市教育委員会

協力：京都文教大学、有限責任事業組合まちとしごと総合研究所



Contents (目次)

- P 3 開催趣旨・背景、ごあいさつ
- P 4 京都ワカモノガタリ～地域で遊ぶ若者～
- P 10 小さな若者博“ちいわか”
- P 14 ワークショップ
- P 15 開催を終えて（こども家庭庁、京都市から）

開催趣旨・背景

近年、若者の活動はますます多様化し、社会や地域とつながりながら、自らの関心を形にする姿が多く見られます。京都市内の7か所の青少年活動センターでも、興味・関心を発信し、地域とのつながりの中で活動を発展させる若者たちと出会ってきました。

今年度のユースシンポジウムでは、「若者一人ひとりの物語」に焦点を当てました。なぜその活動をしているのか、どんな人と出会い、何を原動力にしているのか、センターで出会う若者たちの声に耳を傾ける中で、「その背景や想いをもっと知りたい」という思いが、この企画の出発点となりました。シンポジウムを通じて、若者たちの物語を共有し、地域との心地よいつながり方について考える機会をつくる。そして、参加者一人ひとりが自分自身の歩みを振り返る場になればと考え、開催しました。

※ユースシンポジウムとは、若者や若者の支援・活動に関わる人など市民とともに、研究・討議・対話する機会として、毎年テーマを変えながら実施しています。2024年度は京都市下京青少年活動センターが主幹となり、京都市内にある7つの青少年活動センターが協同で開催しました。

ごあいさつ

「すごいユースシンポジウムになりました」

公益財団法人 京都市ユースサービス協会 事務局

若者たちが好きなことを出展する若者博、若者たちが活動している現場へ行く地域体験ツアー、これらの参加者が一堂に会して若者と地域・大人の関係やあり方を考えるワークショップがありました。

この3つの取組のプロデューサーやナビゲーターは、青少年活動センターで出会った若者が務めてくれました。こども家庭庁、京都市子ども若者未来部の方々は、地域体験ツアーにも参加されました。まちとしごと総合研究所の方は運営へのアドバイス、京都文教大学の方はツアーの実施協力をいただきました。

初めてユースシンポジウムの主担当となった下京青少年活動センターはじめスタッフは、調整の苦労もしましたが、若者のエネルギーと地域の可能性を改めて感じる機会でした。

この報告書をご覧いただければ、若者たちの物語や、若者と地域の心地よいつながりを感じていただけたと思います。



京都ワカモノガタリ

～地域で遊ぶ若者～

京都ワカモノガタリは、「学生のまち」と呼ばれる京都を舞台に、地域とともに生きる若者たちが紡いできた「物語」を追体験できるイベントです。今回のシンポジウムでは、京都で活躍する多様な若者のなかから5組の若者に密着しました。次頁

以降の各ツアー報告から、若者一人ひとりの活動への情熱や、これまで紡がれた物語、そしてユースシンポジウム当日の物語に触れてみてください。

プロデューサー：鳥井 直輝



兵庫県神戸市出身。京都市立芸術大学プロダクトデザイン専攻4回生。京都・崇仁地域を拠点に地域の「つくる」をテーマに活動を行う。崇仁の革を使った製品企画や、ツアープログラムの運営、住民のものづくりワークショップなどをする中で、崇仁地域「らしさ」を発信するデザインを日々模索している。



京都ワカモノガタリのプロデュースを通じて、僕自身が感じたことを綴ります。1番勉強になったことは、地域で活動する若者それぞれの活動スタイルの幅を見られたことです。5組全ての若者に出会い、話す中で、それぞれの若者は心地よい地域との関係性を作り上げていました。

プロデュースしていたときは、この若者の企画が難しいとか、実際に場所に行かないとダメかなとか、自分の中で制限を設けてしまったことで、企画全体の首を締めていたと後悔と反省をしています。

地域と関わること自体に若者がどこまで踏み込んでいるか、その深さに価値があるのではなく、地域を自らの活動の場として、「自分らしく」活用しているからこそ、それぞれの活動が輝いて見えるのかなと思えました。

若者一人ひとりの「地域」の捉え方に意味があるわけではなく、長い目で見たその土地のどこかにその若者たちの活動が誰か1人に刺さったり、受け継がれていたりいかなかったりすることに意味があるのかなとか。そんなことを考えながら、僕自身も自分の活動を見直すきっかけになりました。自分らしく地域と関われるよう、今後とも頑張りたい所存です。

当日行けなかったのは本当に申し訳なかったですが、関わってくださった皆さんが地域とか若者とか、色々考えるきっかけになっていたら幸いです。



ツアーのしおり

ツアーの目的地やスケジュールが記載されているような一般的なしおりではなく、ツアーを案内するナビゲーターのリアルな声を届けるツールとして、プロデューサー鳥井さんが制作しました。ナビゲーターが地域と向き合う中で直面した悩み、失敗、偶然の出会いや想定外の出来事、またそれら乗り越えてきた先に感じた地域や自分自身の変化など、たくさんの物語が詰め込まれています。



ナビゲーター 島村 純 (Jun)、徳永 朋大 (トック) from JTTF (Japan Top Trick Federation)

参加者 7名

ツアー行程

- ① 工房見学
@京こま雀休
- ② 昼食
@梅小路公園
- ③ こま体験ワークショップ

ナビゲーターである島村純 (Jun) さん、徳永朋大 (トック) さんの思い入れのある場所を巡りました。初めに訪ねた「京こま 雀休」さんでは、こまに関するお話やナビゲーターとの出会いについてお聞きしました。京都の伝統産業である京こまですが、一度は途絶えてしまったそうです。貴重な京こまの制作過程を見学し、1つ1つ丁寧に手作業で作られていることが分かりました。お店には干支やフルーツをモチーフにした多種多様なこまがあり、参加者の皆さんも興味津々な様子でした。

後半は、梅小路公園でこま体験ワークショップをしました。ナビゲーターからこまの回し方を教えてもらい、熱心に練習をしていました。練習の成果もあり、回せるようになった参加者の皆さんは教えてもらった技にも挑戦し、あっという間に時間が過ぎていきました。寒空のなかですが、皆さん夢中になって、こまで遊んでいる姿がとても印象的でした。また、こまの日本チャンピオンである参加者とナビゲーターによるコラボパフォーマンスを見ることができ、とても充実したツアーになりました。



ナビゲーターからコメント

ユースシンポジウムでは、熱い想いを共有できる仲間や、それを形にする場所の大切さを改めて感じました。実際に語り合う中で、「こんな場所があったら」「こんな仕組みがあれば」と、次々にアイデアが湧いてきました。こま回しツアーでは、大人も子供も関係なく、初めて会った人同士が夢中になり、自然と応援し合う姿が印象的でした。こんな瞬間をもっと増やしていくには、想いだけでなく、続けられる仕組みも必要です。これからもこま回して楽しい！カッコいい！と思ってもらえるように活動していきます。



徳永 朋大 (トック)



島村 純 (Jun)

参加者の声

こまの歴史を知れて
こま世界チャンピオンの
技を教えてもらえた。

ナビゲーター 堀 萌香、西村 愛未 from 京都文教大学・KASANEO 参加者 4名

ツアー行程

- 1 モデル・カメラマン体験
@お茶と宇治のまち交流館“茶づな”
- 2 KASANEO フェスの
展示会に参加
@中宇治BASE
- 3 昼食は coconi の
テイクアウト
(京都文教大学
サテライトキャンパス)

ナビゲーターである堀萌香さん、西村愛未さんの思い出の場所を巡りました。

初めに訪れた「お茶と宇治のまち交流館“茶づな”」までの道のりで、参加者の方の人となりを伺ったり、それぞれの思い出の衣服の話で盛り上がっていました。道中の「お茶と宇治のまち歴史公園」や「宇治橋」にて、思い出の衣服を身に着けた参加者のスナップ撮影を行い、ナビゲーター含めみんなの笑顔が自然にこぼれる雰囲気でした。

後半には、毎年ファッションショーやフリーマーケットなどを通じて多世代交流を実施しているKASANEO主催のイベント、KASANEO フェスを見学するために「中宇治BASE」へ向かいました。メンバー着用の衣服やフリーマーケットで販売している衣服のエピソードを聞き、実際にフリーマーケットの衣服を購入した参加者もいれば、メンバーにファッションのコーディネートしてもらった参加者もいました。また、参加者同士で「これ似合うよ!」「この服好きじゃない?」と話している声も聞こえてきました。今回のツアーで、KASANEOが大切にしている多世代交流に触れた参加者は、それぞれが大切にしている思い出を共有するきっかけになりました。



ナビゲーターからコメント

皆さん、この度は京都ワカモノガタリへのご参加ありがとうございました！皆さんもこの機会にはじめてのことを知ったり、気づいたり、つながることはできましたか？思いつく方は、ぜひその出来事を大切にしてください。

学生から社会人になることで、これまでより私だけの力ではできないが増えるでしょう。そんな時に、このワカモノガタリでの思い出が背中を押してくれて、へこたれずに頑張れる気がしています（笑）

それでは皆様、またどこかでお会いしましょう！



堀 萌香



西村 愛未

参加者の声

普段から古着を愛用している為、なんとなく面白そう…と前情報無しで参加してみましたが、大満足の素敵なツアーでした。大学生さんたちの古着に対する想い、その先にある思い出たちに触れる喜び。意外なきっかけから、世代を超えた交流が始まっていくんだという驚きや学びも得る事が出来ました！

ナビゲーター 石澤 遼太郎 from 京都大学・京大カレー部 参加者 9名

ツアー行程

- ① イベントに向けたカレーの試作見学 @BoCS (左京区)
- ② 昼食は試作のカレーをいただきます
- ③ カレー部チームメンバーとの対話会

会場は、日頃、京大カレー部さんがカレーの試作などを作る際に使っておられる「BoCS」で行われました。会場に入ると既に試作カレーの準備が進められており、スパイスの良い匂いが漂う中、ナビゲーターのお話が進んでいきました。初めに、石澤さんの自己紹介から活動内容紹介、実際に活動しているときに直面した課題などが話された後、グループタイムに突入。グループでは先に話された直面した課題に対して、それぞれが思う解決方法を検討していきました。途中、カレーを試食しながら進められましたが、年齢や経験、専門領域などが違うメンバーたちが、同じカレーを食べる中でみるみる関係性が深まっていく様子から、カレーのパワーを強く感じました。最後に、京大カレー部流チームビルディングのポイントとして、「チーム全体で大きな目標を立てること」、「それぞれ強みに特化して、その強みで他のメンバーの弱みをカバーすること」など、色々なポイントをお話いただきました。どれも石澤さんの実体験を通したお話で、参加者も一様に頷きながら聞いておられたのがとても印象的でした。



ナビゲーターからコメント

当初は学生の方が来てくださるのを予想していましたが当日になってみると社会人の方が多く驚きました。今回のツアーではカレー部が過去に直面した問題を紹介し、参加者の方ならどうするかを考える内容でした。当日参加者の方と意見交換をする中で、実際にチームで困った経験を持った方が多数いらっしゃることに気づき、各自の経験を共有する時間を確保することになったのは良い意味での想定外な展開だったと思います。当日提供したカレーも楽しんでいただければ幸いです。

今後も京大カレー部は京都府内で時折出店するので見かけた際は是非お立ち寄りください！



石澤 遼太郎

参加者の声

- ・とても楽しく、若いも年寄りも同じ悩みを共有出来とても良かったです。
- ・グループ内で違う意見が出てくるのがすごくいいなと思いました。京大カレー部の活動の課題、部ができた経歴みたいな事を聞いて何かを活動していくには、主体性や自主性が大事だなと学びました。そして、カレーを通してのつながりが出来たと思います。

ナビゲーター 福本 航大 from 京都大学・こども食堂「からふる」

参加者 5名

ツアー行程

- 1 妙蓮寺での料理のお手伝い、見学
- 2 あまから食堂の見学、昼食
- 3 ナビゲーター、尼さんとの対話会

今回のツアーでは、地域で活動している若者たちが運営する「こども食堂」について、実際に上京区で行われている「あまからこども食堂」に参加しました。この「あまからこども食堂」は、こども食堂「からふる」と妙蓮寺の住職さんが一緒に取り組まれています。

ツアー当日のメニューは、クリスマスイメージしたデコレーションハンバーグでした。参加者で盛り付けや配膳のお手伝いをした後は、みんなで「いただきます!」。栄養たっぷりのおいしいごはんをいただきながら、ナビゲーターから出されたテーマ『子ども食堂がある社会、ない社会』について話し合いました。

「あまからこども食堂」を通じて、地域の子どもたちだけでなく、メンバーの大学生たちの居場所にもなっているというお話が印象的でした。参加者は「こども食堂」に関心がありながらも、これまで接点を持っていなかった方が多かったのですが、率直な思いを交わし合うことができ、それぞれが「こども食堂」についての捉え方が変わったり、考えを深めたりすることができました。



ナビゲーターからコメント

ユースシンポジウムでは様々な人と出会い、活発な議論ができたことが印象に残っています。こども食堂など、「居場所」というものが社会的に大きく変わろうとしている過渡期であるとお聞きし、今我々が行う活動を大学生を含む「こどもたち」に広げ、その子たちが大人になった時に気軽に自分のこどもをこども食堂に行かせるようにしたいと思いました。僕たちの活動は専門家のような福祉活動ではありませんが、これからも「こどもたち」と一緒に楽しさが溢れるような居場所を作り上げたいと思います。



福本 航大

参加者の声

- ・実際に活動が行われている場で、提供されているご飯を食べた経験はとても貴重なものでした。更に、現場に携わっている方と、子ども食堂の在り方や居場所支援について深く語り合えて、自分自身の大学でのボランティア活動にも活かしたいと思いました。自分の中で、この課題に取り組むことの覚悟や志を新たに持つことができました。
- ・「こども食堂」のイメージが変わりました。いろいろな方とのつながりができることが良いと思いました。

ナビゲーター 宮武 愛海 from sampai

参加者 7名

ツアー行程

- ①西陣と sampai の事例紹介
- ②シルクスクリーンでの製品づくりワークショップ
- ③昼食
- ④小さな若者博での販売体験

宮武さんが大切にしている想い、地域での活動、日本の文化が衰退していくことへの問題意識など、様々なお話を聞きました。その後はみんなでシルクスクリーンのワークショップをしました。地域からいただいた素材で作られた正絹の巾着にプリントするという、珍しい体験となりました。本物の絹の触り心地を体感しながら、一人一人自分でプリントする位置を決めて作り、どうしたら買った人に製品の背景が伝えられるかを考えながら、ブランド名と価格を話し合いました。色々なアイデアがでたなか、最後に決まったのは「りた～んもの（「～」はくるんとまわしています）」というブランド名。リターンと反物、二つの言葉を掛け合わせた名前です。販売する際には、一人一人自分たちが作った作品についてお客さんに語り、「想いを紡ぐ」という sampai の活動を体験しました。自分の言葉で語っている姿がとても印象的で、完売した時はみんなとっても良い笑顔でした。短い時間でしたが、それぞれに多くのことを学び、感じた時間となりました。



ナビゲーターからコメント

幅広い世代がツアーに参加してくれたので、年齢・性別を超えて「ものづくり」に向き合うことができました。決められた時間内で、製品制作・ブランドづくり・販売方法・価格などをチームで相談し、机上でとどまらず、実際に自分たちの手でお客さんに販売するという体験まで行えたことは私たちのワークショップづくりにおいて大きな進歩となりました。今後も sampai として、商品を買ってもらうだけでなく、作る場所から多くの人に関わってもらえるワークショップや場づくりをしていきたいと思いました。



宮武愛海

参加者の声

- ・学びがとても多かったのと体験までしっかりとできた。
- ・京都の伝統工芸文化や歴史について深く知れた。モノを買う際の新たな価値観を知ることができた。

小さな若者博

小さな若者博“ちいわか”とは、若者の「好き」に焦点を当て、「行っている活動とそれを始めたきっかけの見える化」を目的にしたイベント型プログラムです。

ユースシンポジウム当日は、若者団体が屋外と屋内に分かれてブースを出展し、行っている活動の様子がわかるパネルや展示、物販、ワークショップなどを行いました。

来場者に自分たちのやっている活動についての紹介をしたり参加者同士で活動の内容を話したりと、活発な交流が生まれていました。

プロデューサー：大谷 穂高



ハナヲタパネル代表。京都市を中心に地域と若者を緩やかに繋ぐお仕事をしています。自分のデザインしたプロジェクトが「花束」のような存在となって、このまちに住む人々の心が少しでも温かくなればいいなという思いで活動に取り組んでいます。

今回は、青少年活動センターのスタッフの皆様をはじめ、たくさんの方と連携しながら企画を進めました。そのため、業務の洗い出しや担当の振り分け、各担当の進捗状況の確認など、自分自身の普段のお仕事に比べてより広い視点で全体像を把握する必要があり、準備の段階で少し苦戦する場面もありました。

ただ、結果としてイベントには多くの若者にブース出店をして頂くことが出来たので、その点に関しては満足しています。

また、私個人としても、ちいわか博で出会った団体の方と、コラボのお話なども含めて継続的に関係性を築くことが出来たり、来場された方が主催するイベントに、ちいわか博の出店者の方が出店するなど、すでにアクションが生まれているお話なども伺っており、その点に関しても嬉しく思います。

しかしながら、やはり集客面では若い世代の来場者がそこまで多くなかったため、今後の課題になると感じました。

自分自身の活動における今後の展望としては、今回のちいわか博を通じて本当に様々な活動をされている若い世代がいることを実感したので、より多種多様な若者と地域との「掛け算の選択肢」をもっと提案出来るようになりたいと感じました。



出展者紹介パンフレット

小さな若者博のパンフレットは、地域で活動している若者たちが「なぜその活動をやると思ったのか」という経緯や、出展する若者の人となりを知るツールとして、プロデューサーの大谷さんによって制作されました。制作にあたっては、各団体の若者たちへインタビューを行い、活動をはじめたきっかけから、活動をする中で葛藤や今後の展望など、それぞれの持つ思いをきき取りました。パンフレットに載せきれなかったインタビュー内容は、当日パネルでも展示されました。



小さな若者博 出展団体一覧 (17団体)

1 iroiro kyoto



2 ぬいぬいふぁくとりー



3 potential



4 Sucre



5 SHAKE ART !



6 LoveCentRal



7 Dance 巣食う



8 京都パスタ専門店
YuPPenJobs



9 あいあむ！



10 らくさい鉄輪



11 開建高校
未来協創会議



12 京都橘大学
ピアカウンセリングサークル



13 ぱくちゃんす



14 特定非営利活動法人
お客様がいらっしゃいました。



15 京都文教大学 地域連携学生プロジェクト
宇治☆茶レンジャー



16 京薬かるた会



17 miiko



京都パスタ専門店 YuPPenJoBs

高石 柚哉、中川 夏実

小さな若者博では、ゆずちゃ、ゆずティー、プレーンの3種類のフィナンシェを用意し屋外ブースで販売させていただきました。近くのブースには他のサークル、学生団体、個人の作家さんの展示や販売が行われていました。中には高校生も参加されていて、自分より年下の方が積極的に動いている姿を見ると、行動するのに年齢は関係ないと感じました。屋内ブースには参加型のものも開催され、実際に体験しながらほかの団体さんの

活動を知ることができました。

午後からはワークショップへ。テーマは若者と地域、大人のよりよい関係づくり。ワークショップを通じ、若者の活動を応援しようと思っている団体、大人は想像以上に多いんだなということを感じさせられました。私たちの活動も多くの方と関わっていますが、今一度感謝の気持ちをもって活動していきたいと思うような1日でした。



高石 柚哉



中川 夏実 (写真右から2人目)

potential

常深 彩羽

ちいわか博に出店させていただいて、同世代の方が私たちとは異なる分野で活躍されていたり、私たちも実際に体験してみたいと感じた出展者様がたくさんおられました！ potentialのブースでは、個人のお客様に私たちの活動内容を丁寧に紹介することができたり、普段あまり来られても体験していただけることが少ない大人の皆さまにもアクセサリ製作を体験していただくことができました。今後のpotentialでは、イベントのみならず多方面での活躍ができるように改めて活動を進めていきたいと思っています！



あいあむ！

子ども・若者の居場所 あいあむ！では、クリスマスリース作りワークショップ、飲み物・手作りキーホルダー販売のブースを出展しました。普段の活動の雰囲気を感じていただけるように企画したワークショップでは、子どもたちが楽しんで作っている様子を見ていて、私たちも楽しかったです。

学生スタッフ手作りの折り鶴キーホルダーもたくさんの方が手に取ってくださり、自分たちが作ったもので喜んでいただける嬉しさを感じました。

ユースシンポジウムに参加して、様々な活動をしておられる団体の方々と関わることができ、新しい発見がありました。今後も、私たちの活動を知っていただくだけでなく、他の団体さんに関わり、それぞれがより良い活動ができるよう協力していきたいと思っています。

企画自体が多様なジャンルがあったので、自身が今まで関わったことがないような人たちともお話できたところが良かったです。特に、外で活動していたブースと関わりを持つことが多く（身体のこと、アクセサリ、お菓子、お茶など）、実際にアクションを起こしていて、行動力があると感じました。

お客さんとして来てくれる方は大人の方が多く、学生や同年代の人たちが関わることができたら双方にとって刺激になるため、学生や若者たちに向けての呼び込み、集客の必要性を感じました。



大谷 穂高



小林 遥

京都文教大学 地域連携学生プロジェクト 宇治☆茶レンジャー

森島 淳

植苗 琴音



小さな若者博に出展してみて、形や目的は違っても、若者主体で活動している団体がこんなにもあるのかと思いました。シンポジウムを通して自分の活動を客観的に振り返ったりする機会になったなと思ったり、ワークショップを通して、他の団体の方と自分たちの活動をベースに意見交流をしたりなど様々な良い機会に恵まれたなと思っています。今回のユースシンポで感じたり、知ったりしたことやワークショップでいいなと思った意見などを、自分たちの活動の形に取り入れたりして、これからも活動していきたいと思っています。



ワークショップ

「若者が『やりたいこと』を形にする＝活動するために、つながりをつくるには？」というユースシンポジウム2024のテーマについて考えるワークショップを行い、「京都ワカモノガタリ」や「小さな若者博」の参加者や関係者を中心に、61名の参加がありました。最初のグループワークでは、互いの自己紹介やそれぞれの体験を通して感じたことの共有を行いました。初対面と思えないほど、参加者同士で語り合う様子が印象的でした。

その後は「活動の開始・継続には何が必要か」「若者、地域のお互いにとって居心地のいいあり方とは？」という2つの問

いについて、グループで大切だと思うキーワードや要素を考える時間となりました。「京都ワカモノガタリ」のナビゲーターや参加者のみなさん、「小さな若者博」のプロデューサーや出展団体の方々、若者の活動を応援したい地域や大人まで、それぞれが立場を超えて話し合う姿に、会場は熱狂に包まれていました。

各グループから抽出された要素やキーワードを基に、それぞれの問いに対して図1、2のように整理することができました。これらの要素の一つひとつが、若者のやりたいことを実現し、地域と共に成長する鍵となるのではないのでしょうか。

プロデューサー：尾関 武尊



関西大学大学院修士2回生。学習・教育環境づくりに関心をもち、学内の授業支援の活動などに携わる。昨年度、下京青少年活動センターのサポートを受けて、生き方や進路に悩む若者に向け、多様な生き方を知る多世代交流の企画『ヒトナリライブラリ』を行った。ラーメンが好き。

今回のワークショップは担当チームで議論を繰り返す中で形になってゆき、到底一人では出来ませんでした。むしろ話し合いの過程が重要だったと感じています。会議では「若者と大人が支援者と被支援者の関係でいいのか」「与える—もらうの意識だと両者にとって不都合がある」といった内容が頻繁に話されました。このような言語化は私にとっても気づきであり、この気づきの体験をワークショップで再現したいと考えました。また私自身、成人している学生、学生であるが非常勤職員といわば「若者と大人」との境界にいます。このことはワークショップの構想に少なからず影響していたでしょう。そして今回の経験から、自分がどのように地域・若者と関わる大人で在りたいかがより具体化されました。このような体験を経た私が、今後は大人／支援者という立場になることも何らかの意味があると感じます。今後は、私自身が様々な人とつながる、その環境や人をつくる、そういった側面にも着目していきたいです。

参加者の声

- ・グループ内の意見交流では、ツアーで感じたことや学んだことがそれぞれ違うけれど、ツアーごとでいろんな体験、交流したことをシェアできてそういう考えもあるんだなと気づくことができました。
- ・「出会い」「活動のきっかけ」「場所」などのキーワードを聞きながら、受け入れる地域側として、場所の運営者として、いまの若い世代がどういうことを考えているかを知るいい機会になりました。
- ・地域での若者、住民の居場所に必要なものとは？についてのテーマで難しいお題だなと思ったけど、意見交流していく中で、日頃から地域のつながりを持つことが大切だと考えることができました。



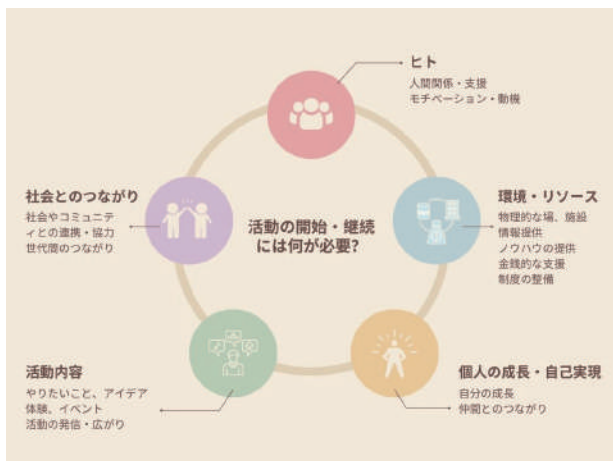


図1



図2

開催を終えて

つなぐ、つながる、こどもまんなか

こども家庭庁
こどもまんなかアクションチーム

会場の下京青少年活動センターに一歩足を踏み入れたとたん、京都のワカモノたちの活気が伝わってきました。地域で活動するワカモノたち一人ひとりのストーリーに焦点を当てた今回のシンポジウムは、こども家庭庁にとって初のスタイルでの開催。参加した庁メンバーは「京こま」の体験ワークショップ、大学生と尼さんがつくるこども食堂、小さな若者博をそれぞれ体験しましたが、そこに共通していたのは、ワカモノが「自分の好き」や「楽しいと思えること」を出発点に地域とのつながりを持ち活動を広げている、ということでした。

こども家庭庁が掲げる「こどもまんなか」は、こども・若者を、社会をいっしょにつくっていく「共創パートナー」ととらえた考え方でもあります。京都市ではこれがカタチになりつつある、ということを実感できたシンポジウムとなりました。

「好き」がつなぐ、若者と地域

京都市子ども若者はぐくみ局
子ども若者未来部育成推進課

今回のシンポジウムでは、ツアーに同行後、「若者」と「地域・大人」の関係をテーマにしたワークショップにも参加をさせていただきました。ワークショップでは、若者自身の「地域・大人」に対しての考え、実際に活動をしている立場として求めていることなど、率直な声を聞くことができ、貴重な機会となりました。

ワークショップでも、「人との繋がりが広がることで活動も広がる」という意見があり、若者が地域で活動をしていく中で、地域との関わり・繋がりは欠かせないものだと感じました。

シンポジウムを通じて、若者が自分の「好き」を原動力にして、地域で幅広い活動を形にしていることが参加者に伝わるとともに、若者同士も、同世代の活動を知り、つながるきっかけになったシンポジウムであったと思います。

本市も引き続き、若者の皆様の声に耳を傾けながら、「こどもまんなか」のまち京都を目指していきます。

ユースシンポジウム2024報告書

発行 2025年3月

担当者名一覧

青木 理紗、上田 廣久、大西 真由、加藤 優花、鐘ヶ江 翼、北澤 凜、國府 宙世、
小嶋 薫、齊藤 彩乃、齋藤 千枝、竹久 輝頭、富田 千裕、二輪 百合子、樋口 貴昭、
山内 愛実、米田 光晴、若山 健策、渡邊 萌未（50音順）

著作・問い合わせ先

公益財団法人 京都市ユースサービス協会
京都市下京青少年活動センター
〒600-8202 京都市下京区川端町13
TEL：075-353-7750 FAX：075-353-7740
E-mail：shimogyo@ys-kyoto.org

京都市ユースサービス協会は、若者とともに未来を描き、若者が生きやすい社会をつくれます。

協会事務局
〒604-8147 京都市中京区東洞院通六角下ル御射山町262（3階）
京都市中央青少年活動センター内
TEL：075-213-3681 FAX：075-231-1231
E-mail：office@ys-kyoto.org

無断転載を禁じます。

Copyright©2024KYOTO CITY YOUTH SERVICE FOUNDATION ALL RIGHT RESERVED



京都市は持続可能な開発目標（SDGs）を推進しています。